1

町医山科言経の開業背景：人間交流と諸ネットワークについて

アンドリュー・ゴーブル

Department of History, University of Oregon, USA

公家山科言経は 1585 年に京都から流され，1586 年から少なくとも 15 年間大阪天満本願寺と京都六条本願寺で寺内町医として医療活動を行った．患者数，投薬数，使用処方数，処方使用回数と使用薬剤数，投薬調剤量は段々増えた．調剤や処方の成分と加減率も変化した．

これまでの研究は言経の町医としての医療活動を解釈するために西本願寺の首脳者の支援，言経の公家的資格や家伝的治療経験，近隣者の治療依頼，等を指摘する．本発表はそれに加えてこれまでに注目されていなかった言経を支えた人間交流と諸ネットワークについて述べる．

第一の支援ネットワークは 30 年間の間に少なくとも 15 人の医者や医薬に興味を持つ人々で構成された．彼らの出身は様々であった．例えば，朝廷に仕える名医，平民出身の新興医者階層，寺院に属する僧医，鍼灸の専門家，家伝として医薬を学ぶ人々（親戚を含む），寺内町の庶民向き医療活動を行う人々，寺社を拠点にして近隣の村人に治療を与える人物であった．その 15 人の中には次の人物が特に重要であった．大和入道宗恕：106 歳で死去，20 年間に師弟的な関係を持ち続け，多数の医書と方書を備え，脈診の診察をした．高野本願高政上人と特にその弟子永運坊：16 年間の交流，方書を貸し，伝授を教えられ，治療方法を相談する．古市入道宗超：少なくとも 25 年間接待し，治療を受け，薬草と薬剤を交換する．秦宗巴：10 年間の間に世話になり，4 年間の間には言経の専任医師，名薬を補給した．又は曲直瀬道三と曲直瀬玄朔：父親の紹介で 20 年間の間友好関係を持ち，幼い時に治療を受け，時には患者の症状と治療を相談した．

その交流の結果，特に注目すべき事は言経の治療知識の発展と医書の所有が重要であった．言経は「三位法眼家伝秘方」等の家伝的な方書を所持したがそれらは町医としての医療活動を行うのに不足であったであろう．日記によると大阪の天満本願寺に移動する前に 25 種の医書，方書や伝授を所持した．6 種は自分の物で，19 種は他の医者から入手した．その 19 種の中の 9 種は大盛方院家に関係を持つ大和入道宗恕から入手，3 種は永運坊から入手．天満本願寺に移動する際には 7 種持っていたが京都の支援者により重要な曲直瀬流の医書が手に入りそれを治療に利用した．つまり，医者ネットワークがなかったら高く評価される医療活動を実行できなかったと思われる．

第二の支援ネットワークは大阪の連歌会の人物で構成されていた．1586 年と 1587 年の二年間に 51 回の集まりがあった．1586 年には 52 人が出席した．毎回少なくとも 4 人，多くは 13 人が参加し，平均で 9 人が出席した．その中心人物の身分，出身，仕事，活躍範囲は異なった．文化人，文学者，商人，寺内町の統制者，政治有力者の家臣，湯屋の経営者，旅人，地方から来た本願寺の参拝者，寺社関係者，他の医師，等が確認できる．その 52 人のなかでは 10 人は連歌会の中核であった．彼ら社会人にとって，会は共通の趣味を楽しむ機会だけではなく，互いの利益のための情報ネットワークを広げる大事な機会でもあったと思われる．町医の言経の場合は様々な利益やメリットがあった．例えば，口込みで彼の医者としての評判が広まった；新患者を連歌会メンバーに紹介された；間接に直接に，他の医者との関係は強まった；医書の所持者の存在をも知った；等の様相が想像できる．